日本ロシア文学会・日本スラヴ学研究会共催
オンライン　シンポジウム・講演会

プログラム

13：00－13：40　日本スラヴ学研究会総会

第１部　シンポジウム（14：00－17：20）

記憶と創造の中の祖国・歴史・越境

ロシア・東欧における文化と変容

司会：**越野剛**（慶應義塾大学）　コメンテーター：**中村唯史**（京都大学）

14：00－14：10　開会挨拶　**長與進**（日本スラヴ学研究会会長・早稲田大学名誉教授）
14：10－14：35　**阿部賢一**（東京大学）「**ミラン・クンデラと翻訳**」
14：35－15：00　**菅原祥**（京都産業大学）「**炭鉱経験を再考する：ポーランド、カトヴィツェ郊外のアマチュア画家グループの考察から**」
15：00－15：15　質疑応答
15：15－15：30　休憩
15：30－15：55　**平松潤奈**（金沢大学）「**ソ連強制収容所とその記憶**」
15：55－16：20　**岩本和久**（札幌大学）「**現代ロシア・アートとグローバリズム**」
16：20－16：45　**井上暁子**（熊本大学）「**国境地帯の文学の挑戦：ずれを抱え込む空間から、ずれを引き起こす空間へ**」
16：45－17：15　質疑応答
17：15－17：20　閉会挨拶　**三谷惠子**（日本ロシア文学会会長・日本スラヴ学研究会企画編集委員長）

シンポジウムは公開で行いますので、日本ロシア文学会、日本スラヴ学研究会の会員以外の方も、参加を歓迎いたします。参加希望の方はどなたも**事前参加登録**をお願いします。**事前登録については裏面をご確認ください**。

第２部　講演（17：40－19：00）

沼野充義（東京大学名誉教授・名古屋外国語大学副学長）

亡命・ユートピア・世界――ロシア・東欧を超えて

司会：**望月哲男**（北海道大学名誉教授・中央学院大学）

6月26日

土

ЯАР 日本ロシア文学会
Японская Ассоциация Русистов

The Japan Society for the Study of Slavic Languages and Literatures
JSS SLL

事前登録について

シンポジウムへの参加を希望される方

参加希望者は右の QR コードから事前参加登録をお願いします。
両学会の HP からも事前登録いただけます。
日本ロシア文学会　http://yaar.jpn.org/
日本スラヴ学研究会　https://www.jsssll.org/
※日本スラヴ学研究会会員以外の方は当日 13 時 40 分以降にご参加ください。

講演への参加を希望される方

両会の会員の方のみ、右の QR コードから参加登録ください。

会員外の方は YouTube の同時配信を右の QR コード
または下記からご覧いただけます。登録は不要です。
https://youtu.be/ydwtSKuhxdU

シンポジウム用Zoom登録リンク

Zoom登録リンク

YouTube配信リンク

シンポジウム発表概要

阿部賢一「ミラン・クンデラと翻訳」

旧チェコスロヴァキア出身でフランスに移住した作家ミラン・クンデラ（1929 年生まれ）は、つねに翻訳の問題に対峙してきた。祖国で発表が禁止されて以降、西側で公に流通するのは翻訳のみであったが、初期においてその質は必ずしも満足するものではなかったからである。その一方、チェコ時代において、クンデラは少なからず翻訳にも従事していた。本報告では、チェコ時代の「翻訳するクンデラ」とフランス時代の「翻訳されるクンデラ」という二つの観点から、クンデラと翻訳の関係について検討する。

菅原祥「炭鉱経験を再考する：ポーランド、カトヴィツェ郊外のアマチュア画家グループの考察から」

社会主義時代のポーランドにおいて「炭鉱」は、さまざまな意味において特権的・象徴的な位置付けを有する場であった。他方、近年では環境問題への意識の高まりなどから、ポーランドにおいて「炭鉱」および「石炭」はますますネガティブな意味づけを与えられるようになりつつある。このような炭鉱をめぐるまなざしの変化を背景として、本報告ではあえてかつてのポーランドにおける炭鉱経験とその文化的意義を再考することで、「炭鉱」という場をめぐる文化の可能性について考えてみたい。このような問題意識の一環として、本報告ではポーランド・カトヴィツェ市郊外のヴィエチョレク炭鉱の労働者を中心としてかつて活動していたアマチュア画家グループ「ヤヌフ・グループ」の主要な画家たち（T. オチェプカ、E. ガヴリク、P. ヴルベル、E. スフカら）の作品を紹介しながら、そこにおける「炭鉱」や「炭鉱住宅」の経験の描かれ方を検討する。

平松潤奈「ソ連強制収容所とその記憶」

現代ロシアがいまだに収容所を過去のものにできていないことは、昨今のニュースからも明らかである。本報告では、まず最新のソ連強制収容所研究を紹介したうえで、同時代的に形成されたソ連公式文学（社会主義リアリズム）と収容所の関係性について検討し、さらに、ポスト・ソヴィエト時代における収容所やテロルの記憶、そして過去の克服の問題にも触れる。ソ連・ロシア社会が強制収容所をどのように生み出し、その存在をどのように認識してきたのかを、20 世紀から 21 世紀にいたる長期的な展望のもとに示したい。

岩本和久「現代ロシア・アートとグローバリズム」

ペレストロイカ期の非公式アートは、社会主義体制下でのユニークな活動として国際的に注目された。一方、現代ロシアのアーティストは AES+F のように、グローバルな視野で民族や性、環境など資本主義社会に共通する課題に取り組んでいる。本報告ではコンセプチュアリズムのアーティスト、パーヴェル・ペッペルシテインの絵画や小説について、シュプレマティズムやレーニン、独ソ戦、冷戦といったロシア・ソ連的なテーマと、アメリカニズムやピカソといったグローバルなテーマの双方を検討し、その上で、資本主義社会のアンチ・テーゼとしてのロシア性を明らかにする。

井上暁子「国境地帯の文学の挑戦：ずれを抱え込む空間から、ずれを引き起こす空間へ」

ポーランド語の「クレスィ」は、14 世紀に成立したポーランド＝リトアニア同君連合国の東部辺境地域（現リトアニア・ベラルーシ・ウクライナの一部）をさす地理的呼称だったが、ポーランドが分割統治された 18 世紀から 20 世紀初頭においては、地理的意味は薄れ、ナショナルで強烈な政治的な概念（神話）として機能した。20 世紀半ば以降は、クレスィ出身の亡命作家の手で、多元性という普遍的価値とローカルな場所に対する個人の愛着を二大要素とする新たな神話的空間が、クレスィを舞台に創造されたが、それが 1980 年代末から 2000 年代初頭に大きなブームとなった「プライベートな祖国の文学」の神話性とどのような影響関係にあるのかは、現在まで十分に検討されていない。しかし国境地帯の文学において、複雑な歴史や文化をもつ空間を、自身の過去や記憶を頼りに想起し、それを神話的空間として表出する文学的手法とリアリズム的手法の併用、空間を断片的かつ流動的に描く旅行者のまなざしは、少なくとも亡命地で書かれた一部の「小さな祖国の文学」と、1980 年代以降、西部国境地帯で書かれた「プライベートな祖国の文学」に共通してみられる特徴である。網羅的に検討することはできないが、本報告では「人間は空間をどのように描くのか」というシンプルな問いに立ち返り、イーフー・トゥアンが『空間の経験』で述べた、人間の経験に基づく空間理解の二つのアプローチを用いて、国境地帯の文学における神話的空間の描かれ方を比較検討する。最終的には、多元性がもたらす「ずれ」に新たな価値を見出そうとする現代文学の傾向を明らかにする。

講演

沼野充義「亡命・ユートピア・世界――ロシア・東欧を超えて」

私のこの 20 年くらいの関心は、個別作家研究やロシア・ポーランドといった特定の国の枠を超えて、亡命・ユートピア・世界という三つのテーマをめぐって展開してきた。それは既に『亡命文学論』『ユートピア文学論』『世界文学論』という三冊の論集の形になっているが、2000 年代初頭に出た最初の二巻が近く大幅な増補改訂を経て実質的に新しい著作として出版され、＜徹夜の塊＞三部作として完結することになった。これを機に、研究の軌跡を振り返りたい。もちろんそれで終わりというわけではなく、むしろそれがこの先どこにつながっていくのか、立ち止まって考えてみたい。